

映像作品から見る鉄のカーテンの内側 —ロマン・カチャーノフと「哀感」のロシア史— 土浦日本大学中等教育学校 5年C組 遠藤咲

研究目的

ソビエト連邦の雪解け以降に制作されたロマン・カチャーノフ監督の子供向け映像作品に付き纏う決して明るくはない表現の数々に感じられる「哀感」の原因を探る。

時系列

- 1956年 フルシチョフのスターリン批判(雪解け)
- 1966年 絵本作品『ワニのゲーナとおともだち』制作
- 1967年 映像作品『ミトン』公開¹
- 1968年 チェコ事件
- 1969年 映像作品『チェブラーシカ』公開²
- 1970年 映像作品『レター』公開¹
- 1972年 映像作品『ママ』公開¹

作品紹介

ミトン

1969年制作。
ひとりぼっちの少女アーニャが子犬を飼いたいと母親に言うが許可されず、手袋を子犬に見立て遊んでいると、手袋が子犬に変化し楽しいひとときを過ごすというストーリー。
彼女の住んでいる家はフルシチョフカだと考えられる。

(写真引用:映画.com ミトン <https://eiga.com/movie/76272/>)



チェブラーシカ

1967年制作開始のシリーズものの作品。
エドゥアルド・ウスペンスキー作
「ワニのゲーナとおともだち」を原作とする。
主人公チェブラーシカは南国から輸入されたオレンジの木箱とともにソ連に来てしまった正体不明の生き物。

孤独なワニのゲーナと友達作りに奮闘する。
(写真引用:Мультики студии Союзмультфильм Чебурашка и Крокодил Гена — все серии подряд [HD] <https://youtu.be/aMHFMdAaBTQ?feature=shared>)



レター

1970年制作。
海軍で働く父親からの手紙を待ち侘びる息子とその母を描く。
非現実が入り混じるファンタジックな作風と、ミリタリー色の強い現実的な作品背景の融合が特徴。

ママ

1972年制作。
留守番させている息子を心配する母親の姿を描く。
物が不足し行列に並ばなければ商品が買えない当時の社会情勢を風刺しながらも、子供に対する母親の確かな愛情が伺える。

映像作品とプロパガンダ

カチャーノフが所属するソюзムリフィルムはスターリン政権時代に設立されたものであり、プロパガンダの一翼を担うものであった。しかし、雪解けや子供向けという観点から検閲が緩み、西側諸国の技術も取り入れたことでオリジナルの表現が増えていき、イデオロギーやプロパガンダ的意味合いを失っていった。³
このような点を踏まえると雪解け以降の映像作品は鉄のカーテンの内側を覗くのに重要な史料だと言える。

結論

- 雪解け以降に制作されたロマン・カチャーノフ監督の子供向け映像作品に付き纏う「哀感」は当時社会で **子供が孤独を抱きやすく社会的弱者になりやすい環境** だったことが原因である。
- この表現の傾向は雪解け以降に始まったものではなく、**世相を反映させたものが好まれる傾向**にあり「栄光」より「共感」が重視される。

研究方法

- 『チェブラーシカ』『ミトン』『レター』『ママ』の4作品の特徴と当時の情勢や歴史を照らし合わせる。
- 映像作品以外(民謡・軍歌)の心理描写と比較する。

結果1 哀感の原因は何か？

共通する特徴

- ①家族が多くない
- ②保護されるべき存在の哀感
- ③大人と子供の距離感が遠い

①について

- 家族が全く存在しない、または母親しか登場せず一人っ子が多い。
- 唯一父親の存在が確認できる『レター』でも終盤まで消息がわからない。
→第二次世界大戦や革命による片親世帯や戦争孤児の増加特に大粛清により将校の処刑、追放が多く、人海戦術を用いた結果犠牲者が多数に及んだ。市街戦もあり民衆の犠牲も多い。⁴
(例として、スターリングラード攻防戦では民間含め約3人に1人が亡くなっている。⁴)

②、③について

- 大人が子供たち(チェブラーシカ含む)の要求をスルーする傾向がある。(②)
- 心理面での距離感、すれ違いがある。(③)
→住まいがコムナルカからフルシチョフカに変わる転換期にあった。⁵
父親は戦争に、母親は仕事に行くとすると子供の遊び相手がなくなる。
→物資の不足から、満足に子供の要求に応じてあげられない。

結果2 雪解け以降のみの風潮なのか？

ロシア帝国時代

『カリнка』

苦味と毒のあるカリнкаと甘みのあるマリнкаの対比を幸福と不幸の対比やロシアと異国の対比と重ね合わせているという説が存在する。⁶

『コサックの子守歌』

将来コサック騎兵団に入る運命にある幼い息子を想う母親の気持ちが歌詞となっている。

スターリン政権時代

『ポーリュシカ・ポーレ』

恋人が戦地へ行くのを悲しむ少女が出てくる。直接軍隊を題材としながらも「泣く」「悲しい」といった単語が出てくる。
ソ連邦元帥であったヴォロシーロフに献呈されている。

『カチューシャ』

国境警備を行う恋人に向けて健気な想いを歌う少女が描かれる。
国境警備という設定は当時の情勢を意図的に反映させ書き足されたもの。

- **繊細な心理描写や哲学的な表現、世相を反映したものが多い。**
軍歌も同様に「士気を上げる」「戦争の栄光を讃える」というよりも哀感から生まれる「共感」の方が重視されている。 これを士気が下がるとして禁止されたということもない。

引用文献・参考文献

- ¹ロマン・カチャーノフ監督. DVD『ミトン』NBC ユニバーサル・エンターテイメント, 2004年
- ²ロマン・カチャーノフ監督. DVD『チェブラーシカ』クロックワークス, 2002年
- ³本木貴子, 南條涼子. ソビエトデザイン 1950-1989. グラフィック社, 2019年
- ⁴小高正稔, 斎木伸生, 毒島刀也, 伊藤龍太郎. 独ソ戦のすべて. 晋遊舎, 2022年
- ⁵長谷川章. チェブラーシカはなぜ悲しげなのか—ソ連崩壊以降のソビエト・アニメーション解釈を読み直す—. 秋田大学, 2018年
<https://air.repo.nii.ac.jp/record/3129/files/kbj73%2869%29.pdf>(参照: 2025年12月20日 p.70)
- ⁶Т.Г.Бочина. КЛЮЧЕВЫЕ СЛОВА ФОЛЬКЛОРНОЙ КАРТИНЫ МИРА В ПОСЛОВИЦЕ-АНТИТЕЗЕ. КАЗАНСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ УНИВЕРСИТЕТ, 2003年
<https://web.archive.org/web/20100327221957/http://www.ksu.ru/fil/kn7/index.php?sod=9>
(参照: 2025年12月25日)